

総合科学科におけるキャリア教育を軸とした

グローバル人材育成の試み

～SGH 3 年目における 1 年次生の学年経営実践報告～

平成 28 年度第 1 年次（総合科学科第 23 期生）担任団
加藤 敦子 中井 毅 栗飯原 匡伸 吉田 賢一
木村 彩 塗田 佳枝 北原 立朗 福田 美紀

学年経営は日々の指導の積み重ねによって成される。これさえ行えば何もかもうまく行くというような秘策はない。担任副担任でチームを組み、生徒集団を複数の目で見守りながら、授業や行事を展開していく。本年次は本校総合科学科 20 年余りの歴史が築きあげたキャリア教育を大切にしながら、スーパーグローバルハイスクール（SGH）の目標であるグローバル人材の育成に向けて取り組んできた。本稿ではその 1 年間の取り組みについて報告する。

キーワード キャリアデザイン 研究スキル キャリア教育 SGH グローバル人材育成

1. はじめに

平成 6 年に総合科学科に改編して以来、本校では「産業社会と人間」に取り組んできた。生徒はこの授業を通して、自己を見つめ、職業社会を概観し、将来に思いを馳せ、思い描いた将来を実現するために、高校時代に何を学ぶべきかバックキャストで考えた上で、2、3 年次の科目を自らの意志で選択する。本校総合科学科 20 年余りの歴史の中で、「産業社会と人間」は一貫してキャリア教育の中心に据えられてきた科目である。その後、総合科学科が定着してきた平成 11 年に、同授業の導入行事として入学式直後に「コミュニケーション・キャンプ」を実施するようになった。これは単に宿泊を伴う行事ではなく、その後の年次集団の在り方を左右する大切な行事である。さらに、平成 23 年度に始まった「キャリアデザイン」は、主に学びのスキルや社会的スキルを獲得することを目標に授業が構成されてきた。1 年次の学年経営に携わるとき、「産業社会と人間」と「キャリアデザイン」をどう展開していくのかは大きな課題となる。そして、平成 26 年度に文科省から「スーパーグローバルハイスクール」（SGH）に指定されたことを機に、グローバル人材の育成を目標に掲げ、1 年次の 3 月に「カナダ校外学習」を実施するようになった。

本稿ではこうした流れの中で、総合科学科第 23 期生がどのように「コミュニケーション・キャンプ」「産業社会

と人間」「キャリアデザイン」「カナダ校外学習」に取り組んできたかを中心に実践報告を行う。

2. 「コミュニケーションキャンプ」の実践

（1）はじめに

入学式翌日の 4 月 10 日（日）より、3 泊 4 日の日程でコミュニケーションキャンプ（以下「コミキャン」と表記）を実施した。コミキャンは学校指定必修科目「産業社会と人間」の一環として実施され、総合学科での学習の導入と位置づけられている。本年度で 17 年目の実施となり、1 年次の行事として定着している。

近年、生徒の変化に対応して、コミキャンでも様々な新しい取組（前々年度のロングハイク・昆虫食、前年度の筑波大学訪問）等が行われてきた。

今年度は、近年の新たなチャレンジに敬意を表しつつも、今まで先達たちが培ってきたプログラムを大幅に復活させることとした。また復活させた「伝統的な」プログラムにあわせて、付随の試みを行った。

以下、2017 年度のコミキャンについて報告し、事後アンケート等から評価を行うものとする。

（2）コミキャンの目的

生徒向けには以下の 3 点を掲げた。

1. 新しく知り合った新入生 169 名の仲間との友情を

培う

Ⅱ. 総合学科における学習姿勢について学ぶ

Ⅲ. 人間と自然環境が調和して生活することを学ぶ
一方、生徒向けとは別に、教員団としての目的も設定した。「コミュニケーション能力の育成」を主眼に置き、

①信頼関係を築く

②(社会で活躍する)大人に出会う

③達成感を味わわせる

④少々負荷を与える

⑤ケジメをつける

(⑥生徒をよく観察する)

以上の6点を設定した。

(3) 実施したプログラム

これらの目標を念頭に置き、コミキャン内のプログラムを設定した。また、プログラムの効果が一過性のものとならぬよう、コミキャン「後」の高校生活の中にもいくつかの仕掛けを作った。

<昼間の活動>

初日 : アイスブレイク、訪問先選び

2・3日目: 朝の講演・MTB・

森のアドベンチャープログラム

最終日 : 班別発表会・クラス対抗レク・カレー作り

<夕食後の活動>

初日 : 副校長講話・学年主任講話・

サイレント学習1

2日目 : 筑波大学名誉教授による講話・

サイレント学習2

3日目 : 社会テスト・クラスレク

プログラムの実施にあたり活動班を組織した。構成員は各クラスからランダムに2〜3名を選び、10名から11名で1つのグループ、16班を編成した。

このグループでアイスブレイク、MTB(マウンテンバイク)、森のアドベンチャープログラムを行い、班内個々人のコミュニケーションを促した。

3日目の夜にクラス毎のレクリエーション、最終日にクラス対抗レクリエーション(大縄飛び)を実施した。

最初はクラスの垣根を越えて構成したグループで、個々の交流をはかり、徐々にクラス意識を高めていくという意図である。

野外活動の中心となるプログラム、MTB・森のアドベンチャープログラムについては、過去に行われていた取組を復活させたものである。(詳細は過去の研究紀要を参照されたし。)この2つのプログラムは長年にわたって

実施され、一定の効果は認められてきたものの、主に生徒の安全性や体力面での懸念等からこの2年実施をしていなかった。

復活にあたり、(大型の除雪車両が通らない)安全なルートの確保、事前指導の徹底など、現地インストラクターとの事前打ち合わせを行った上で実施した。

(4) MTB 職場訪問

MTBについては、野尻湖を一周するなど、体力面でも少々の負荷をかけるルートを選んだ。また、現地信濃町の職場訪問という活動を新たに加えた。これは生徒の目標②にも掲げたが、現地で働く方々を訪問することで、将来のキャリアを考える1つのきっかけとなってくればとの願いからである。

実施方法は以下のとおりである。まず、事前に現地の方々と協力し、訪問可能な事業所を探し出した。事業所は介護施設・IT企業・病院・保育園・観光施設など、多岐にわたった。

キャンプ初日に、それらを生徒達に提示し、活動班ごとに話し合わせ、どの事業所を訪れるか決めさせた。2日目と3日目のMTB活動中に、各事業所を訪問、インタビュー活動を行い、最終日にまとめたものを発表するというものである。

取材発表活動は今回が高校に入ってから初めてであり、発表準備も短く、「最初のきっかけにでもなれば」くらいのつもりであったが、生徒は短期間にまとめ上げ、英語で発表する班もあった。発表会に来られた事業所の方が感動のあまり涙を流すという場面もあった。

コミキャンに始まった、グループ別の取材・発表の取組は、6月の筑波大学訪問、翌年4月のコミ旅へと受け継がれることとなった。

(5) 以後の学校生活につながる取組

コミキャン内では「5分前集合」の徹底をはかった。また、数度の講演活動の中で「話を聞く姿勢」を身につけるように喚起した。コミキャン以降、学年の集まりがあるときは常に「5分前集合」を意識させることで、2年次になった今でも、ほぼその習慣は守られている。

「サイレント学習」から「社会テスト」の流れの中で、「学習する姿勢」を涵養しようと試みた。

「サイレント学習」は、時間を決めて、黙って自学をする活動であり、その学習の目標として「社会テスト(中学程度の日本史のテスト)」を実施した。2年次になった今でも、「サイレント学習」は定期考査前のロングホーム

ルーム等で実施を続けており、定期考査という目標に向けた学習の習慣を促めている。

コミキャン以後の、生活習慣の確立のため、「朝のチェックシート」を実施した。これは登校直後に「昨日勉強を1時間以上やったか」などの5項目に答え、冊子を提出するというものである。朝のショートホームルームが無い本校では、冊子の提出をもって担任の遅刻チェックとなった。冊子の提出も毎朝5分前に終わるクラスもあり、コミキャンの流れが1年間つながる一助となった。

(6) アンケート結果から

コミキャン実施直前と直後に生徒アンケートを行った。結果は別表のとおりである。

特に目立つのが項目1不安、3友達、4学習、6表現である。数値の高いものより見ていく。

4学習。「学習に集中して取り組むことが出来た」と思う生徒が、4段階評価で1.12ポイントも上昇している。本校は偏差値で言えば中程度の学校であり、あまり勉強をしてきた経験が無い生徒が多かったのかもしれない。「サイレント学習」から「テスト」の流れの中で、「勉強すればある程度の成果が出る」という意識が高まればありがたい。

1不安、3友達。新しい学校に対する不安が0.78減少し、「仲良く出来た」が0.98ポイント上昇している。コミキャンの本来の目的である「コミュニケーション能力の育成」はある程度達成されたようである。

6表現。「自分の気持ちや考えを伝えることが出来た」が0.71ポイント上昇している。アイスブレイクでの自己表現をうながす仕掛け、グループ発表等が影響していると思われる。

一方で、寛容性、思いやり、キャリア意識といった項目では低い数値が出ている。職場訪問を実施したが、それほど生徒達には響かなかったようである。職場訪問の時期や他のプログラムとの兼ね合いを再検討する必要があるかもしれない。

以上、若干効果があった面、少なかった面もあると思われるが、今後の活動の参考になれば幸いである。

3. 「産業社会と人間」の実践

(1) 本校の「産業社会と人間」について

総合学科高校においては、自己の進路への自覚を深めさせるとともに、将来の職業生活の基礎となる知識・技術等を修得させるため原則としてすべての生徒に「産業社会と人間」(以下「産社」と略す)を履修させるよう文

部科学省から設定されている。

本校の「産社」は、本校開発科目である「産業理解」と併せて、実質上4単位で実施していた。しかし教育課程の改定にともない、平成23年度よりこれを発展的に改組し、当科目を単独として実施することとなった。今年度は、金曜日5・6限に開講し、担当者は年次の教員8名である。

さて、文部科学省によると、「産社」の目標は以下のとおりである。

ア 自己の生き方を探求させるという観点から、自己啓発的な体験学習や討論などを通して、職業の選択決定に必要な能力・態度、将来の職業生活に必要な態度やコミュニケーション能力を養うとともに、自己の充実や生きがいを目指し、生涯にわたって学習に取り組む意欲や態度の育成を図ること。

イ 現実の産業社会やその中での自己の在り方生き方について認識させ、豊かな社会を築くために積極的に寄与する意欲や態度の育成を図ることとすること。

文部科学省「総合学科について」より引用(最終アクセス日:2016年1月6日:

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/seido/1258029.htm)

これらの目標に加えて、「産社」には科目選択を手助けするガイダンス科目としての役割も期待されている。当然、時間割を決めるには、自分の興味分野をはじめ、将来の進路や職業選択も含めて幅広く自己の生き方を探究することが必要となる。そのため、今年度の「産社」は、自己の生き方を探究し、適切に時間割を選択するためのガイダンスを用意した。以下、実践報告及び生徒アンケートの分析を通じて、今年度の授業を反省的に振り返る。

(2) 授業実践

以下、今年度の取り組みをダイジェスト版で紹介する。

●特別支援学校との交流会

1. 主題とねらい

自己の生き方を探究するうえで、異なる他者の考え方や視点を知るとは有益である。その一環として、本学附属特別支援学校及び坂戸市立坂戸中学校支援学級との交流会を企画した。交流会は、「多様性」を意識するSGHの研究課題とも合致しており、且つ本校では毎年取り組

む教育メニューとなっている。

今年度は、以下のスケジュールで交流会を実施した。

・2016年6月3日(金): 弁護士 大胡田 誠氏による
公演会

・2016年10月14日: 福祉講話

(担当: 福祉科 熊倉教諭)

・2016年10月21日: 特別支援学校概説、およびアイ
マスク体験

・2016年11月10日(木): 1年C組

(坂戸中学校支援学級が来校)

・2016年11月15日(火): 1年B組

(附属大塚特別支援学校訪問)

・2016年11月15日(火): 1年D組

(附属桐が丘特別支援学校訪問)

・2016年11月22日(火): 1年A組

(附属聴覚特別支援学校訪問)

II 具体的な内容

①大胡田誠弁護士 講演会

一学期に『全盲の僕が弁護士になった理由』の著者である大胡田誠氏による講演会を実施した。なお、大胡田氏は、本学附属視覚特別支援学校の卒業生である。

講演会のねらいは、他者の人生に耳を傾け自己の生き方を探究させることである。そのねらいを達成するうえで、数多くの困難を乗り越えてきた大胡田氏が最適な人物だと考え、講演を依頼した。また、二学期に実施予定の交流会のキックオフとしての要素も考慮した。

大胡田氏の講演は、ソフトな語り口であったが、一言一言がとても重く聞こえ、生徒にも教員にもそして保護者にとっても胸に響く講演会となった。

②福祉講話

福祉科の熊倉教諭より、特別支援学校の概要、及び障がいとは何かというテーマで講話をしてもらった。特に、社会や制度の側が「障がい」を創り出しているという話は、生徒の中で腑に落ちる部分が多かったようである。

また、活動としては簡単な単語を唇の動きだけで伝える「読唇」に取り組んだ。また、別の日にアイマスク体験も実施し、障がいをもつ人の立場を体験的に理解できる機会を設けた。

③交流会(1年D組を事例に)

各クラスが別の学校と交流するが、本稿ではD組の実践事例を報告する。D組(44名)は、附属桐が丘特別支

援学校を訪問し交流した。事前にD組より6名の生徒を幹事として選出した。そのうち2名が、事前に附属桐が丘特別支援学校を訪問し、交流先の高校1年生たちと打ち合わせをした。その結果、以下の内容を実施することとした。

・アイスブレイク

まず初めに、D組の生徒が音頭を取ってアイスブレイクに取り組んだ。その内容は、簡単な単語を唇の動きだけで伝える「読唇」というものである。読唇は、聴覚特別支援学校でよく取り組まれている。そのことも踏まえて、各グループのリーダーに短い単語を伝えて、それをグループ内で読唇してもらった。最後に、D組の幹事よりアイスブレイクで「読唇」に取り組んだ意味について説明し、アイスブレイクを終えた。

・車いす体験

附属桐が丘特別支援学校の生徒は、肢体不自由な生徒が多いため、多くの生徒が車いすで生活している。交流会では、車いすの方が日常生活においてどのようなことに困難を感じているかを理解するため、車いす体験を実施した。1センチにみたいな段差でも乗り越えるのが困難であり、時には視覚障がい者のための点字ブロックも、移動の妨げとなる。普段の生活では気づくことができない視点であり、D組の生徒にとっては新鮮な体験となった。

・ボッチャ体験

「ボッチャは、ヨーロッパで生まれた重度脳性麻痺者もしくは同程度の四肢重度機能障がい者のために考案されたスポーツで、パラリンピックの正式種目です。ジャックボール(目標球)と呼ばれる白いボールに、赤・青のそれぞれ6球ずつのボールを投げたり、転がしたり、他のボールに当てたりして、いかに近づけるかを競います。」(日本ボッチャ協会より引用。)

附属桐が丘特別支援学校は、ボッチャに取り組んでおり、且つ卒業生の中にはパラリンピックの選手もいる。

本交流会では、2016年がパラリンピックイヤーであり、かつ健常者も障がい者も楽しめるスポーツであるということで、ボッチャを体験した。目標球にボールを近づけるのは予想以上に難しく、本校の生徒は苦戦を強いられていた。しかし、桐が丘の生徒からアドバイスを受けながら続けた結果、目標球にだいぶ近づけるようになった。

本校は、オリンピック・パラリンピック教育にも力を入れており、その意味でもボッチャの体験は、有益なものとなった。

・グループトーク

各グループ内で、事前に本校の生徒が作成した事例を題材に、お互いが意見をぶつけるという企画を実施した。たとえば、駅のプラットフォームで車いすの人が困っている場合、どう対応すればよいか、などの具体的な場面を想定しながら、日ごろ疑問に思っていることを、お互いにぶつける機会を作った。

この企画は、両校の生徒にとって印象的だったようである。つまり、同世代の普通学級の生徒と特別支援学校の生徒が、お互いの本音を語り合う機会はほぼないと言ってよい。特に、桐が丘の生徒にとっては、同世代の普通学級の生徒と語り合うのは、小学校以来だという生徒もあり、かなり新鮮だったようである。また、本校の生徒にとっても多様性を体感し、その重要性を意識するよい機会となった。

●科目選択支援

時間割作成に関するガイダンスは、「産社」の基本的な機能のひとつである。そのため、今年度は以下のガイダンスを用意した。

- ・第一回科目群ガイダンス（4つの科目群の学びを網羅的に解説）
- ・授業見学会（専門科目の授業見学会を実施）
- ・三者面談（保護者、生徒、担任の三者で科目選択に関する基本的な方向性を確認）
- ・入試制度概説（大学入試を考えた場合に考慮すべき履修上の注意点について解説）
- ・第二回科目群ガイダンス（履修上の留意点について、再度各科目群より説明）

もちろん、これらの総括的ガイダンスだけではなく、担任による二者面談や科目担当者との面談も重要なガイダンスとなっている。また、3年生による卒業研究の中間発表会に全員出席し、3年生の卒業研究の内容と科目群の学びの関連についても知る機会を提供した。

なお、近年、入試制度が大幅に変わってきており、その動きは流動的である。そのため、時間割作成に限った形ではなく、常に最新の入試動向を生徒に提供していくことが求められる。

●菜園づくり

I. 主題とねらい

本校には、たぐいまれな広大な農場がある。その敷地を活かし、1年生全員が枝豆の栽培に取り組んだ。育て

る喜びや食への感謝のきもちを醸成することもさることながら、班ごとに畑を与えて栽培することで、共同活動の大切さも実感することが可能となる。班編成は、コミキャンと同じであり、クラスを超えた友人作りにも役立つように配慮した。

また、本校の「生物資源・環境科学科目群」には、農業関連の授業が多数設置されている。仮に、農業関係の授業を履修する場合、事前に簡単な体験をすることが、履修上のミスマッチを防ぐことに役立つ。そのため、本活動は時間割作成のガイダンスとしての役割も担っている。

II. 具体的な内容

各班に圃場を割り当て枝豆を栽培した。授業は、農業科の教員によるレクチャーのもとに実施した。そのプロセスは、全体作業日の前日に各班の班長が農場に集合し、農業科教員から翌日の作業内容を学習する。それを、翌日に班員に伝達し、作業するというプロセスを経た。また、水やりや雑草の除去は、各班が工夫して取り組むことにした。教員が、日常的な水やりや除草を指示したことはなかった。

- ・4月中旬：菜園ガイダンス、施肥実習、整地実習、植え。
- ・5月上旬：定植実習
- ・5月下旬～6月上旬：土寄せ実習
- ・7月：収穫祭

今年度は、生育調査を徹底することができなかった。実施の有無は生徒にゆだねた。その結果、各クラス数名の生徒がスケッチやコメントを出してきただけであった。原因は、担当者の経験のなさ及び教員の多忙によるところが大きい。各班が意欲的に菜園実習に取り組むために、今まで以上に魅力的な仕掛けを準備する必要がある。

●筑波大学見学会

I. 主題とねらい

本校は、平成26年度に文部科学省よりスーパーグローバルハイスクール(SGH)に指定された。それに伴い、本校は、グローバル30に代表される国際化に重点を置く大学への進学を意識する生徒を、「SG入試」で獲得していくという方針を打ち出している。親大学を知り、進路に対する意識を高めるための仕掛けとして、入学後早い時期に筑波大学見学会を開催することにした。

II. 具体的な内容

①伊藤眞副学長（教育担当）、及び本校卒業生による講話
伊藤副学長より、筑波大学の全体説明、及び附属坂戸高校の生徒に対するメッセージをいただいた。そのあと、本校卒業生かつ筑波大学で学んでいる学生から後輩へのメッセージをもらった。

②授業見学会、及びキャンパスツアー

本学社会連携課に依頼し、授業見学可能な講義をリストアップしてもらった。事前に参加授業ごとに班を編成し、各班に学生がつきガイドしてもらった。なお、学生ガイドは本校で教育実習を経験した元実習生を中心に依頼した。生徒とは実習以来の再会であり、良い交流となった。なお、参加した授業は、できる限り本校の科目群の学びと会う形でリストアップするように配慮した。

③振り返り

事後学習として、参加した講義の内容を班ごとにまとめた。模造紙に講義内容をまとめたものをポスター発表の練習も兼ねて実施した。

●ライフプラン発表会

I. 主題とねらい

生徒は、年度末の12月～1月にかけて「ライフプラン」を作文し、発表することが求められる。入学後、生徒は科目選択に向けて過去を振り返り、自らの興味分野を探りながら自己と対峙してきた。その内容を、ライフプランというかたちで文章にし、クラスメートの前で発表するのである。ライフプラン発表は、自己と向き合った結果を他者と共有し、よりよいコミュニティ形成に資する。

II. 具体的な内容

冬休み中に生徒はライフプランを完成させることが期待される。1月の授業では、クラスメート全員の前でひとりひとり発表する。

発表を聞いた生徒は、「応援メッセージ」を記入し発表者に手渡す。「応援メッセージ」の作成は、他者から共感されている感覚を得るうえで役立ったようである。

最終的に、クラスの代表者を1名選出し、総合学科研究大会でステージ発表してもらった。まさに、ライフプランは「産業社会と人間」を締めくくる授業なのである。

（3）生徒アンケートの結果から

I. 科目選択から見る「産社」

科目選択を通じて自己の興味や生き方を考えさせることは、産社の基本的なガイダンス機能である。では、科

目選択のサポートという観点からみると、今年度の産社はどうかだったのだろうか。

①科目選択ガイダンスと授業見学会

今年度は、各科目群の概要を説明するガイダンスを2回実施した。また、主に専門教科の授業見学会を1回開催した。

アンケート結果によると、全体の55.6%が「科目選択ガイダンス」が科目選択において役立ったと回答している。もちろん、本校が総合学科高校であることを知ったうえで入学するわけだが、アンケート結果を見ると「入学するまで専門科目の授業がどのような授業なのか全く分かっていなかったが、詳しく知ることができた。」という回答もあった。その意味でも、基本的な科目選択ガイダンスは継続したほうが良いと推察される。

②菜園活動

今年度は、一学期に枝豆の栽培と収穫を実施した。この活動には、農業系の授業を選択する生徒に対するガイダンス機能を持たせている。

アンケート結果によると、11.3%の生徒が科目選択において役立ったと回答した。その理由として、以下のコメントが挙げられる。

・豆を育てるだけでもいろいろな課題が発生することがわかり、農業が楽しく興味深く思えるようになったから。
・菜園活動を通じて、自分は何をすることが好きなのか知ることができた。

加えて、当初は農業に興味を持っていたが、菜園活動を通じて農業が自分には向かないと判断し、異なる科目群を選択する生徒も複数いた。

II. 自己の生き方を考える「産社」

さまざまなシカケや体験を通じて、自己の生き方を考えさせることは、産社の重要な使命である。では、今年度の活動のうち、どの活動が自己の生き方を見つめるうえで役に立ったのだろうか。

①ライフプラン発表会

ライフプラン発表を挙げる生徒が全体の35.6%であった。自らの過去を振り返り、そして未来に向けた宣言を文章にした経験は、自己と対峙する上で効果的だった。生徒のコメントを掲載する。

・自分はどうやって生きてきてどう成長して「今の自分」になったのか、自分自身を振り返る良いきっかけになった。理想の自分を目指そうと思った。

・ふだん、友達と楽しく話しているだけではわからない過去のことや家庭のことなど、真剣な話をたくさん聞く

ことができて、いろいろな人の人生観を知ることができたから。

・初めて自分についてしっかり見つめて考えることができたから。

・悩んでいたけれど、みんなのライフプランを聞いて吹っ切れたから。

②福祉社会を知る

今年度は、福祉関係の活動として「大胡田誠弁護士講演会」、「福祉講話」、及び「特別支援学校交流会」を開催した。

その中でも、全盲の弁護士として活躍中の大胡田氏の講演会を、18.5%の生徒が自己の生き方を考えるうえで参考になったと答えた。以下、生徒のコメントを掲載する。

・大胡田先生の話を受けて福祉にかかわる仕事がしたいとはっきりと言えるようになったから。

(4) 結論に代えて

今年度の「産社」は、本校が今まで取り組んできた教育実践を活かしながら進めてきた。課題として、次の二点を挙げる。一点目は、工学・情報システムに関する科目ガイダンスが不足したこと、そして二点目は、「産社」のSGH化である。

第一に工学・情報システムに関するガイダンスが不足したことに関して、生徒から直接意見をもらった。たしかに、菜園は農業系のガイダンスであり、特別支援学校交流会は福祉系のガイダンスの色合いが強い。一方で、工学・情報システムに関する具体的な活動、たとえば体験授業等を準備することはできなかった。本校が総合学科である以上、すべての専門教科のガイダンスや体験を提供することが求められるだろう。

第二に「産社」のSGH化は、本校の将来にとって鍵となる。本校は、平成26年度に文部科学省よりスーパーグローバルハイスクール(SGH)に指定された。本校は、「グローバル人材」を育成するために、入試制度改革及び科目開発に取り組み、抜本的にカリキュラムを改定してきた。しかしながら、総合学科基幹科目である「産社」のSGH化に取り組み切れていないのが現状である。

その理由は、研究開発の構想段階において、「産社」の科目内要検討を開発単位に位置づけていなかったこと、及び教員の業務多忙が挙げられる。しかしながら、研究開発校である以上、すべての科目を開発単位として位置づけ、「教科のSGH化」に取り組むことが求められる。

このことは、自己の生き方を探究し、適切に時間割を

選択するためのガイダンス機能を否定するわけではない。しかし、SGHの研究開発を意識した科目内容の再編が求められている。総合学科のSGH校は全国に3校しか存在しない。そのため、総合学科がはぐくむグローバル人材とは何かを広く世の中に問うためにも、「産社」のSGH化が求められている。

4. 「キャリアデザイン(総合的な学習の時間)」実践報告(1)はじめに

本校では平成27年度入学生から、2年次で実施の「総合的な学習の時間」を1年次学校設定科目「キャリアデザイン」として取り扱うこととしている。それにともない土曜日授業を拡大し、従来隔週で実施されていたものを昨年度から毎週実施とした。

なお、3年次の「卒業研究」への架け橋として、2年次で学校設定科目「T-GAP」(2単位)を受講することとなるが、その基礎的なスキルや考え方を習得する場として「総合的な学習の時間」が1年次に設置されたため、平成26年度までの「キャリアデザイン」(以下「旧・キャリアデザイン」とする)を引き継ぎながら、平成27年度「キャリアデザイン」(以下「新・キャリアデザイン」とする)をベースとし、設計していく必要があった。

そうした旧から新へと移行する中で、従来の「キャリアデザイン」を整理するとともに、新しい「キャリアデザイン」をデザインすることを本年度の目標としている。

(2)「旧・キャリアデザイン」の蹉跎

そもそも総合学科のパイオニア校を標榜する本校において、「キャリア」が何を指すのかは重大なテーマでありながらも、いままで各年次を担当する教員の独自解釈にゆだねられ、全校的に議論され、積極的には全教員間で合意形成なされてこなかった経緯がある。そのため、たとえば、「旧・キャリアデザイン」初年度では、

土曜授業では1年次の通常の授業展開では難しい

「少人数授業」を実現し、「学ぶ楽しさ」を生徒に実感させるとともに、総合学科における学びのスキルを獲得させ、中高接続をスムーズにおこなうことをねらいとした新科目の設置を検討した。

(「筑波大学附属坂戸高等学校 研究紀要」49集)

とある。また同集では、設置する際に、「1年次のよちよち歩きの生徒が『自分のキャリアをデザインまでできるのか』という意見が出され、校内の通称として『pupa

（さなぎ）』という愛称が用いられることになった。」という生々しい記録まである。

すでに設置2年目となる同50集では、本稿と同様の課題意識を次のようにしている。

そもそも、本校が生徒にデザインさせたい「キャリア」とは何か。

これら重要な問いに対して、教員個々人に、それぞれの答えはある。しかし、学校集団として共有し、継続するに足るほどの具体的な答えは確立していない。そうである以上、本科目が初年度に掲げたこれら目標も完成されたものではない。継続的に検証し、熟議していくべきものである。

（「筑波大学附属坂戸高等学校 研究紀要」50集）

と言いながらも、生徒への配布資料「キャリアデザインとは」では、

この、現在からつながっていく「遠い未来」への毎日を、本校では「キャリア」と読んでいます。そのキャリアをデザインする、つまり、あなたの人生を設計するための学びが、「キャリアデザイン」です。

（同50集）

と定義している。初年度では「1年次の今」を、設置2年目では「遠い将来」をテーマに設定するところに本校の混乱が見える。

キャリア教育を語るうえで、生徒の生き方やこの将来意識に偏重していき、時に形而上学的な問いを生徒に投げかけることこそキャリアだとしてしまいがちな誤解は、そもそも「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」とした中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」（平成23年1月31日）によるところが大きいのではないだろうか。

しかし、この一文には、前文として「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自己と役割との関係を見だしていく連なりや積み重ねが、『キャリア』の意味するところである。」とあり、必ずしも、将来性のみを抽出してはいない。また同答申では、「総合学科では（中略）自己の進路への自覚を深めさせるとともに、将来の職業生活の基礎となる能力や態度等を育成するため、原則として履修させるべき科目として

「産業社会と人間」が設けられている。」とあり、本来、この原則に従うならば、「旧・キャリアデザイン」は、将来観や職業観とは早々と切り離されるべきものであった。そして、原則として教育基本法第13条の理念を自覚的に導入しながら、社会の中に置かれ続ける生徒個人のキャリア意識を明確化する科目として定義づける必要があったのではないだろうか。

（3）「新・キャリアデザイン」の継続性

理念についてはやや混乱した一方で、具体的な指導内容については、スキル習得型学習として見解の合意が、多くの学年で断片的になされているように思える。

（ア）本校での学びを進めるための基礎力を身につける。

（学びのスキル）

（イ）場面に応じた行動を取る能力を身につける。（ソーシャル・スキル）

（ウ）自己の生活をコントロールできる能力を身につける。（マネジメント・スキル）

（「筑波大学附属坂戸高等学校 研究紀要」49集）

それが結果的には「旧・キャリアデザイン」が「総合的な学習の時間」にスムーズに移行できたひとつの理由だろう。昨年度「総合学科研究大会資料集」でも「新・キャリアデザイン」について、平成26年度の第18回「総合学科研究大会資料集」より抜粋する形でその継承を宣言しつつ、平成26年度よりスーパーグローバルハイスクール（SGH）に文部科学省より指定され、本校でのSGHの取り組みの1つとして、1年次「産業社会と人間」「キャリアデザイン」の中に『地球市民性の醸成を目指したキャリア教育の推進』という取り組みも加わったことを明確にし、以下のように述べる。

このSGHによって新たに加わった取り組みは、これまで本校が取り組んできた「産業社会と人間」「キャリアデザイン」における現在・未来の自分を見つめながら、今の自分には何が必要なのか、何をなすべきかを考えさせる取り組みに、国際的視点を持つことの大切さを知り積極的に海外で活躍したいという意欲を高めさせる取り組みを加えることによって、生徒自身が国際的な視点を持ったキャリア形成ができるように促すことも科目目標に加わった。このSGHによって追加した科目目標は、自己の外部からの刺激によることが大きいと考えられるため、「キャリアデザイン」の活動の中に国際的な視野を持たせる必要がある。

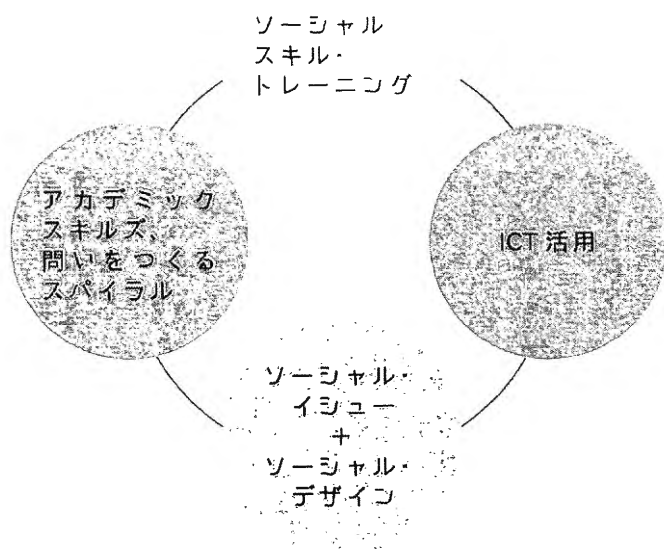
本年度は、この平成27年度のイメージを継承しつつ、SGH 完成学年として展開していくこととした。

(4) 今年度のキャリアデザイン計画

本年度は、「新・キャリアデザイン」のデザインについて以下の6つの能力・資質の育成を核とした。

「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」「イノベーション創出に向けて必要な資質」「グローバル人材に必要な資質」

そのうえで、継承してきた3つのスキル習得型学習をリノベーションし、生徒がおかれている現時的な社会状況や社会的な課題に合わせて具体化し、次のように図示した。



- a) ソーシャルスキル・トレーニング
自己、感情コントロール、SNS コミュニケーション、アサーティブなど
- b) アカデミックスキルズ、問いをつくるスパイラル
学び・研究の基礎を育む
- c) ICT 活用
スタディサプリ、google サイト、google カレンダー、Gmail などの活用
- d) ソーシャル・イシュー + ソーシャル・デザイン
社会の課題、地域活性化、社会貢献、最先端技術など

日本文化/社会の理解・経験、カナダ文化/社会の理解・経験
カナダ校外学習の準備など

また、本学年は、入学式前の段階で2つの取り組みを実施した。

- 1) スタディサプリ 入学式前の3月から英検講座を指定し、入学前課題とした。
- 2) ネットリテラシー講座 入学式前の事前説明会の場において、生徒・保護者向けにネットリテラシーの講座を開いた。
講師：(株) アディッシュ スクールガーディアン事業部 長南 理恵 氏

今年度、アカデミックスキルズを学ぶ場で、優先的にソーシャルスキルと、アンガーマネジメントを置いたのは、昨今の生徒がグループ学習を円滑に行うことができないと予想したからであった。生徒たちが、改めて他者とのコミュニケーションや自己感情のコントロールの方法を知識として獲得することで、効率的にグループ学習ができることを強く期待した。これについて、中島 (2014) は、高校生のグループ学習においてアサーショントレーニングが有効であることを証明した。また、「グループ学習の充実度だけでなく各生徒の主張性や認知的共感性を高めるという双方のメリットがある」と指摘している。

グループ学習の中でも、生徒に「自己評価シート」を記入させることで、グループ活動の中での自己活動を意識するように促した。

外部講師一覧

- 04/23 (株) リクルートマーケティングパートナーズ 中江 真子 氏
- 04/30 本校スクールカウンセラー 北村 篤司 氏
- 05/07 筑波大学 人間系 准教授 飯田 順子 氏
- 06/04 関東学院大学 人間共生学部 准教授 折田 明子 氏
- 06/11 一般社団法人 Fora、(株) リクルートマーケティングパートナーズ 三浦 明子 氏
- 12/10 NPO 法人キッズドア 小杉 真澄 氏

(5) 2 学期ゼミ形式での学習についての概要

5-1 はじめに

各クラス2名ずつで8人の生徒グループを21作成し、

11人の教員がそれぞれのグループを2、3担当するゼミ形式をとり、カナダについての6回（2コマ）の授業を行った。

その際、教員11名で指導や評価の方法を以下のように共有した。

5-2 評価規準

- a) カナダへの校外学習に関わる課題研究のテーマを探ることができる
- b) 国際的な視野を持ち、日常的で身近な事象から、シンプルなソーシャル・イシューを発見することができる
- c) 英語を用いて、社会的な問題についての事実や意見を述べたりすることに挑戦している
- d) グループ学習を円滑に行い、忍耐強く、グループ内の意見の調整を試みつつ、自分の意見を出すことができる

5-3 評価の実際について

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">a) 日々の取り組みの観察と「個人活動報告書」のチェックb) 「グループ活動報告書」のチェックc) 「自己評価表」のチェックd) ポスターの評価e) 発表の評価 |
|--|

成績付けについては、上記5観点それぞれA/B/Cで評価（基準はB）とした。

5-4 教員が指導する範囲とその内容

- a) テーマや研究方法についての助言
- b) 研究・学問に対する誠実性の指導と確認
- c) グループ活動の適切性の保証
- d) アカデミックスキルの指導（出典の明示と情報源の信ぴょう性など）

文献の表記については、『アカデミックスキズ』第2版の附録で統一

- e) 英文等の多言語による情報サイトや論文の紹介（CiniiやGoogle Scholarの利用など）

5-5 グループ活動報告書の提出方法について

ICT活用の一環として、googleサイトを作成（<https://sites.google.com/site/tsukusaka23/>）し、そこからひな型をダウンロードし、wordで作成後、サイトにアップロードすることで提出することとした。各教員は、担当グループの報告書を確認する。教員と生徒共有のクラウドが存在する場合、それを利用することもできるが、本校では双方向的にデータ共有することができなかったため、外部のgoogleサイトを利用することにした。

た。これによって、教員間で他のグループの報告書を確認することができたり、生徒がほかのグループの報告書を参考にすることができるようになった。

これに先立ち、「新・キャリアデザイン」では、生徒全員にgoogleアカウントを作成させ、Gmailを連絡手段として固定したため、本サイトへのアクセスも比較的スムーズに行うことができた。

5-6 [参考資料] 各グループのテーマ

- A) 多国籍》日本人と比べて、あいさつ、生活スタイル、性格、音楽、言語、料理
- B) メープルとカナダ人の歴史
- C) 世界遺産～レッドベイのバスク人捕鯨基地～
- D) 恋愛
- E) カナダ伝統料理を作って食べよう！
- F) Let's compare Canada and Japan's Canned foods!
- G) what should be careful in school trip?～from history～
- H) カナダ先住民の民族衣装について
- I) Canadian life style
- J) Difference between Japan and Canada ～From an interesting low～
- K) カナダの宗教
- L) カナダ人の娯楽（ホームステイ先周辺）
- M) M's Kitchen
- N) 現代のカナダと日本の食文化と比較
- O) 日本とカナダの若者コトバの比較
- P) 林業から見た経済
- Q) OK Dog ー大丈夫犬ー
- R) カナダ人と日本人の味の好みの違い
- S) カナダ映画と日本映画の比較
- T) カナダの年末年始～日本との比較～
- U) カナダの土壌からみるカナダのお菓子の特徴

（6）まとめ

総合学科の本校において、一般的に「調べもの学習」と呼ばれるタスクは多い。その調査方法をアカデミックな研究基礎を位置付けて、体系的に、初年次で教えることのできる「新・キャリアデザイン」の有効性は高い。

「新・キャリアデザイン」の取り組みを経て、2年次で「T-GAP」、3年次で「卒業研究」を行っていくうえで、本年度の指導の評価が相対的に見えてくるはずである。

5. 「カナダ校外学習」の実践報告

（1）はじめに

本校では総合科学科第2期生が平成8年に初めて海外への校外学習を実施したのを皮切りに、約20年に渡り、アジア諸国やオーストラリアへの校外学習を実践してきた。平成26年度にスーパーグローバルハイスクール(SGH)に指定されたことを機に、校外学習の目的地をカナダに切り替えて実施するようになった。平成26年度には、21期生が生徒数名と引率2名と小規模ながら、バンクーバー周辺への校外学習を先行実施した。翌27年度には、「SG入試」を経て入学してきた22期生が、初めて学年規模でのカナダ校外学習を実践した。それまで本校の校外学習は2年次の12月頃の実施が定着していたが、22期生は1年次の3月に実施した。年度末の校外学習に目標を定めて、1年次の英語学習に本気で取り組ませるためと、校外学習で覚えた英語が通じた喜びと伝えきれなかった悔しさを、2年次以降の英語学習の強烈な動機とするためである。画期的な試みとして、通常の期間である1週間に加えて、希望すればもう1週間延長できる制度を採用し、実に半数以上の生徒が2週間カナダに滞在することとなった。目的地は初年度同様バンクーバー周辺としたが、1週間組はアボッツフォード、2週間組はサレーとどちらも校外ながら、異なる2つのエリアを活動場所として選ぶことになった。

本年次はそうした先行的実践を踏まえて、バンクーバー周辺に目的地を定め、1年次末の3月中旬に、全員で10日間の日程を過ごせるようスケジュールを組み、校外学習を実施した。

(2) 目的

本年次におけるカナダ校外学習の目的は、以下の通りである。

- ア) 自国の文化とは異なる文化圏で生活する人々との交流を通じて、異文化について学び、同時に自国の文化を見直し、多文化共生への視点を養う。
- イ) 自国とは異なる社会環境や自然環境の中で見聞を広げ、国際的視野を養うとともに、地球市民性の早期育成を図る。
- ウ) 英語を使ってカナダの人々と意思疎通を図ることによって、英語が通じる喜びを体験し、英語学習の意欲を喚起する。

(3) 実施したプログラム

今回の校外学習の特徴は、以下の通りである。

- ① 全員が校外の街で7日間のホームステイを体験
バンクーバーは世界的に有名な都会であるが、車で東

へ1時間半も走ると穏やかな街が広がる郊外に到達する。ともすればビジネスライクになりがちな都会の一般家庭を避け、ホームステイエリアをゆったりとしたバンクーバー郊外のメイプルリッジ周辺に定めて、今回の校外学習を実施した。生徒は2人1組になり、その地域の一般家庭で1週間に渡るホームステイを体験した。カナダ到着初日は状況に慣れるためホテル泊という考え方もあろうが、本年次はカナダ到着初日からのホームステイに踏み切った。例えば時差が辛かったとしても、そのことを題材にして英語でコミュニケーションを取ってほしいと考えたからである。英語は単なる言語で、それを媒介にして交わすのは心の交流である。ホストファミリーが長旅の疲れを気遣えば、自ずと心の交流は生まれ得る。それを逃すまいと考えたのである。交流には万全の体制で臨む必要はない。用意したものはやがて尽きるが、日々の生活の中で出会う驚きや不都合にこそ、コミュニケーションの必要性は存在する。ホテル泊とは異なり、英語を使わざるを得ない環境になるべく長く生徒を置くことで、英語の実践的使用を促したいと考えたのである。こうした効果が期待できるため、本年次では希望制ではなく全員を対象にホームステイを実施した。諸事情により2件のステイ先変更に対応したが、それ以外はおおむね順調であった。



② UBC訪問

University of British Columbia (UBC) はカナダ屈指の名門大学である。下見をした際に、ぜひとも生徒全員に海外の名門大学の雰囲気味わってほしいと考え、UBCの教授による特別講義を企画した。歴史から社会制度までカナダの紹介といった講義が全て英語でなされたが、スクリーンに映し出された文字が理解の助けとなり、また、短時間の講義であったこともあり、生徒は終始熱心に聞き入っていた。

続いて、生徒10名に1人UBCの学生が案内役となり、キャンパスツアーを行った。



③ 少人数制の英語の授業の実施

メイプルリッジにある高校を1週間借り上げ、校外学習の中心日となる4日間の午前中に、少人数制のESL (English as second language) の授業を展開した。なるべく心理的な障壁をなくし、学びの機会を確保できるよう、生徒の英語力を考慮した上で、習熟度別に10名ごとのグループを組んだ。インストラクターはカナダ人で、各クラスに同年代のバディを2人付けた。現地での活動をサポートしてくれたRED LEAF社のオリジナル教科書を全グループの共通教材として使用したが、授業の方法については各インストラクターに任せる形が取られた。RED LEAF社は日本人団体の受け入れ経験が豊富で、ホストファミリーとのコミュニケーションの機会を多く取れるように、宿題もホストファミリーへの聞き取り調査を中心に用意されていた。最終日には、各クラスで全員が5分程度のプレゼンテーションを行い、ESLの締めとした。その後、インストラクターから修了証を授与され、お礼に日本から用意させた品をインストラクターとバディ2人に手渡させ、4日間のESLを終了した。



④ コース別フィールドワークの実施

ESLの後には、5コースに分かれてフィールドワークを実施した。フィールドワークにはESL授業のバディたちも参加した。コースは次の通りである。

- Aコース 30名：リタイアメントホーム、
フォートラングレー、アートギャラリー
- Bコース 30名：フードバンク、
グランビルアイランド、フォートラングレー
- Cコース 20名：日系プレイス、スティーブストン、
フォートラングレー
- Dコース 30名：フォートラングレー、
グラウスマウンテン、UBC人類博物館
- Eコース 30名：国境・ホワイトロック、
フォートラングレー、グラウスマウンテン

Aコースはリタイアメントホーム訪問を中心に構成した。老人ホームを訪れ、入所者と交流することによって、カナダの福祉のあり方を考える機会を提供したいと考えて用意したコースである。豊かに生きることをテーマにアートギャラリーも訪問先に加えた。



Bコースはフードバンクを中心に構成した。食品が十分に行き渡らない家庭に対して、助け合いの精神で運営されているフードバンクで、食品の袋詰め作業というボランティア活動を体験することによって、社会のあり方を考えるきっかけになってほしいと考えて用意したコースである。このコースは食がテーマであったため、地元の農産物や海産物が集まるグランビルアイランド市場も訪問先に加えた。



Cコースはカナダに渡った日系移民について学ぶため、日系プレイスと、日系移民が最初に入植したスティーズトンへの訪問を中心に構成した。

Dコースは先住民の文化や歴史について学べるUBC人類博物館とグラウスマウンテンのハイアスフィーストハウスでのファーストネーションによる文化講演会を中心に構成したが、諸事情により文化講演会は叶わず、スノーシュー体験に切り替えての実施となった。

Eコースは米国合衆国と国境を接するバンクーバーの地理とカナダの雄大な自然を体感することを主眼に置いて、国境やグラウスマウンテンを中心に構成した。

さらに、全コース共通で **British Columbia** の歴史的建造物を移築し保存してあるフォートラングレーへのフィールドワークを実施した。また、ESLの午後ではなくUBC 訪問の午後に、全員がキャピラノ吊り橋公園を訪れ、カナダの雄大な自然を体感した。

⑤ 課題研究チームのフィールドワーク

本年次には英語母国語話者や英語圏からの帰国子女等既に高い英語力を有する生徒が 10 名程度いる。その生徒たちに対して、カナダでわざわざ英語の授業を受けさせるより、各自の課題について調査させたり、多くを見聞させる方が有益であると考えた。そこで、英語母国語話者と帰国子女と 1 年次 2 学期までに英検 2 級を取得した生徒に課題研究チームを結成させた。人数の関係もあり、同チームにはビクトリアへ遠出をする F コース、米国合衆国シアトルまで遠出をする G コースにそれぞれ 12 名ずつ参加させたかったため、残りの数枠を巡って、英検準 2 級以上を受験することを条件に希望者を募り、英会話力審査を経て残りの生徒を選出した。

課題研究チームはUBCを訪れたとき、他の生徒が昼食後、キャピラノ吊り橋公園へ移動してもなおUBCに残り、UBCの学生たちに各自の課題についてインタビュー調査を行った。

さらに、ESLの時間帯をフルに活用して下記のフィールドワークを実施した。

Fコース 12 名：ビクトリア

Gコース 12 名：米国合衆国ボーイング社、シアトル

FG共通：グラウスマウンテン・ハイアスフィースト

ハウスでファーストネーションの文化体験、

ネイチャーガイドによるスタンレーパークツアー、

キャピラノ吊り橋公園で現地ガイドによる講義等

F・Gコースには終日インストラクターが 1 人ずつ付き、さらに各コースに 2 名のバディも付いた。ESL受

講生徒より遠出をした分費用がかかり、F・Gコース参加者からは追加徴収を行った。



⑥ グループングの工夫

今回の校外学習運営上の難問として、2 人 1 組のホームステイ、10 人 1 組の ESL、20 人～30 人 1 組のフィールドワークのグループングをどうするかという課題があった。まず、フィールドワークのメンバーについては事前に希望を取り、少なくとも第 3 希望に入るように構成した。また、フィールドワークの目的地によってホストファミリーとのミーティングポイントへの帰着時間がまちまちになるため、同じコースに所属する同じクラスの同性生徒をホームステイの相手として組ませた。さらに、ESLの授業の中で午後のフィールドワークについて触れるときに便利のように、各コースを 10 人ずつに分け、ESLのグループとした。その際、先に述べたが、十分な学習を保障するために習熟度別グループとした。そのため、ESLはクラス混合グループで受けることになった。特に、ホームステイの組み合わせには細心の注意を払い、原案を作成した後に校外学習委員の生徒たちに主旨を説明して一緒に確認してもらった。

(4) アンケートの結果から

校外学習実施直後に生徒アンケートを行った。結果は別紙の通りである。

① ホームステイについては、90%以上の生徒が肯定的に捉えていることが分かる。以下生徒の作文である。

「私は子どもが苦手なので、ステイ先に小さな子どもがいることを知って、最初はあまり気が進みませんでした。しかし、ホストファミリーと対面したとき、その思いは一気に消え去りました。6才の男の子と4才の女の子が、真っ直ぐに走って会いに来てくれたからです。面識もない異国人に怯えることもなく笑顔で「ハロー」と言う子ども達に驚きつつも嬉しくなり、カナダでホームステイするってこういうことなのかとハッ

とさせられたのを今でも鮮明に覚えています。この出来事から私は日本でも外国の方々を暖かく向かえ入れたいと思うようになりました。」

- ② ESL 授業についても受講した 140 人のうち 90% 以上の生徒が肯定的に捉えていた。生徒の作文を載せる。

「授業は全て英語で行われると聞いていたので、最初には不安で一杯でした。しかし、カナダ人の先生はとても明るくおおらかで、楽しい活動を多く取り入れた授業をしてくれました。カナダ人バディ 2 人も私たちが困らないようにサポートしてくれて、普段とは一味違う授業を楽しめました。」

- ③ フィールドワークについては ESL 生徒のうち 85% 以上が肯定的であったのに対して、課題研究生徒の肯定率は 95% 以上とさらに高かった。課題研究生徒が時間をかけてフィールドワークを行ったのに対して、ESL 生徒は時間の制約があったからだと思われる。

「私たちはフィールドワークでリタイアメントホームを訪れ、入所者の方々と交流しました。事前に練習しておいた歌を披露したり、折り紙で鶴の作り方を教えたりしました。日本の文化を通して海外の方と交流することができて、良い経験になりました。高齢者の方は話し方が独特で聞き取るのに必死だった上、自分の英語力のなさに気付く面が多々あり、言いたいことが言えずに悔しい思いもしましたが、英語の勉強を今まで以上に頑張ろうと思うようになりました。」

「私たちはフィールドワークでフードバンクに行きました。そこで実際に小麦粉などの袋詰めをするボランティア活動を体験させていただきました。職員は高齢者が多く、私たちの 2 時間分の働きはいつもの 20 時間分に匹敵すると言って感謝してくれました。言葉は違っても誰かの力になることができることに気付き、私の心も温くなりました。同時に、日本でもできることがあるのではないかと考え、これからはボランティア活動にもっと参加したいと思いました。」

- ④ 全体を通してカナダ校外学習はどうだったかの問いに対しては、90% 以上の生徒が肯定的に捉えていた。その中でも課題研究生徒については 100% が肯定的で高い満足度を示していた。

- ⑤ 最後に「今後英語をもっと勉強したいか」と問うたところ、95% 近い生徒が肯定的に回答していた。その理由が「ホームステイ初日と最終日の英語理解度の自己評価」から見て取れる。あくまでも自己評価であって、理解度をテストした結果ではないが、実に多くの

生徒が初日より最終日に理解度が高まったと感じている。人を学習に駆り立てるのは感情的な動機であると仮定すると、慣れるごとに分かるようになったと感じた英語に生徒は学習の希望を見出したと言えよう。

混迷の度を深める昨今の世界情勢を思うと、生徒たちには事象の向こう側にある本質を国際的な視野をもって見つめることのできる人になってほしいと願って止まない。今回の校外学習がその一助になれば幸いである。

6. 外部テスト（英検）受験を奨励する試み

SGH の具体的な数値目標として CEFR B1 レベル（英検 2 級合格程度）到達者が 75% と掲げられている。その分母は 1 年次が 40 人、2 年次が 60 人、3 年次が 80 人となっている。23 期生はこの目標に対して、入学前の課題として例年課していた「中学校の復習」から「英検準 2 級の対策」に切り替えるところから始め、「コミュニケーション英語 I」の授業内での取り組みを中心に、年 3 回行われる英検に挑戦するよう奨励してきた。その結果、1 年次末までに、在籍 165 人中 89 人が準 2 級以上を、そのうち 18 人が 2 級以上を取得し、目標達成率は 60% であった。100% にはほど遠い数字ではあるが、SGH 指定以前の本校の実態と比べれば大きく進歩していることは確かであり、「カナダ校外学習」をきっかけに高まった英語学習熱を追い風に、来年度以降も取り組みを継続させていきたい。

7. おわりに

先に述べたように、学年経営は日々の指導の積み重ねによって成される。この 1 年間、担任副担任でチームを組み知恵を出し合い取り組んできたことが、来年度の「T-GAP（社会的課題の解決を目指したグループ活動の実践）」や、その先の「卒業研究（各自の課題について 1 人 1 人が行う研究）」に活かされ、上手く移行することを期待している。

【参考・引用文献】

- 中島利奈（2014）「高校生のグループ学習におけるアサーション・トレーニングの効果」
対人援助学会 第 6 回ポスター発表 資料
<http://www.humanservices.jp/meeting/2014/15.pdf>
閲覧：2017.05.30
- 「筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要」49 集、50 集

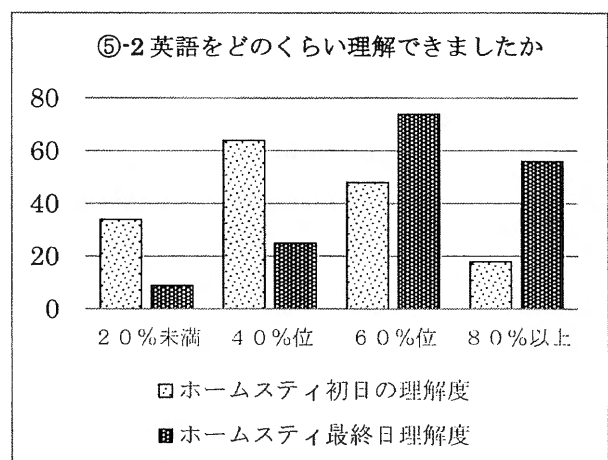
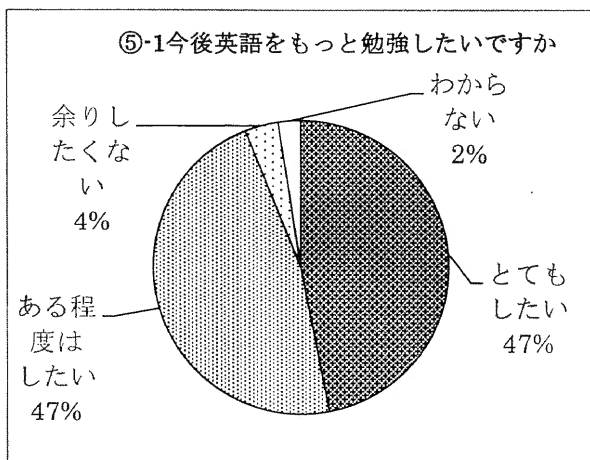
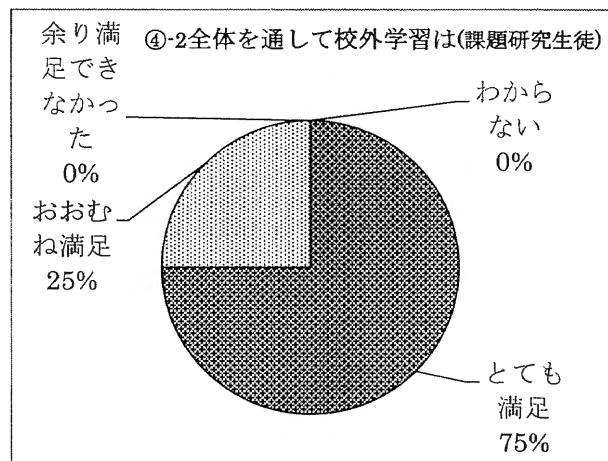
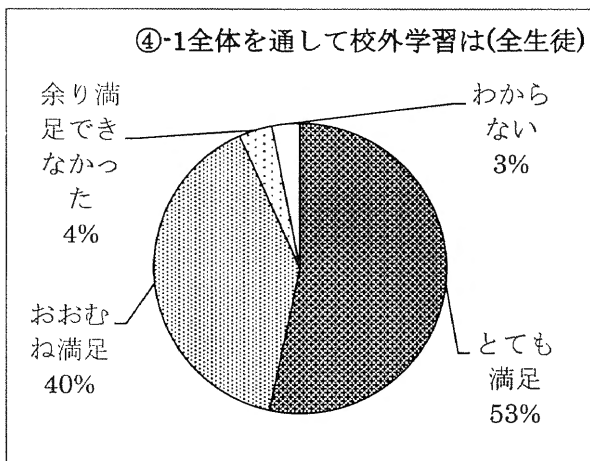
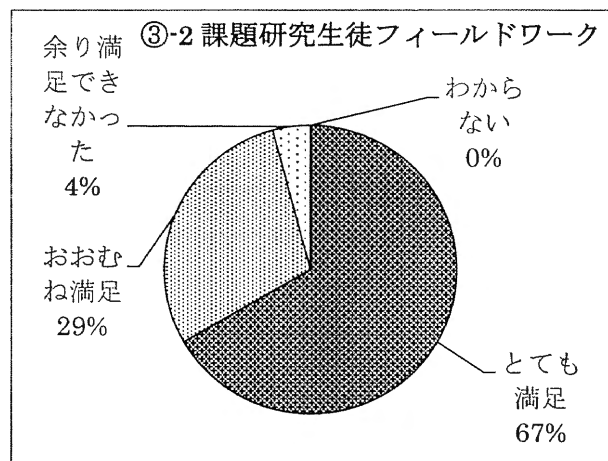
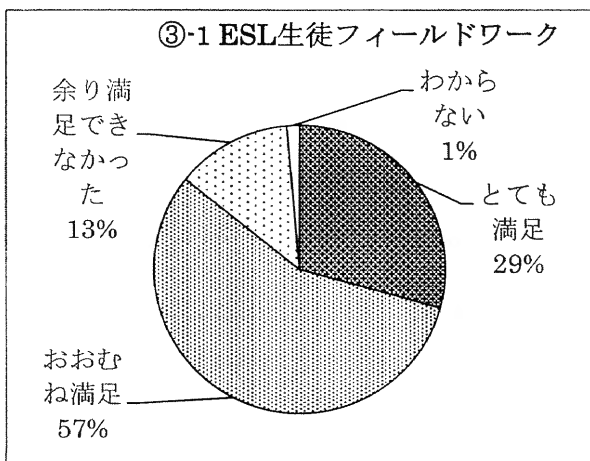
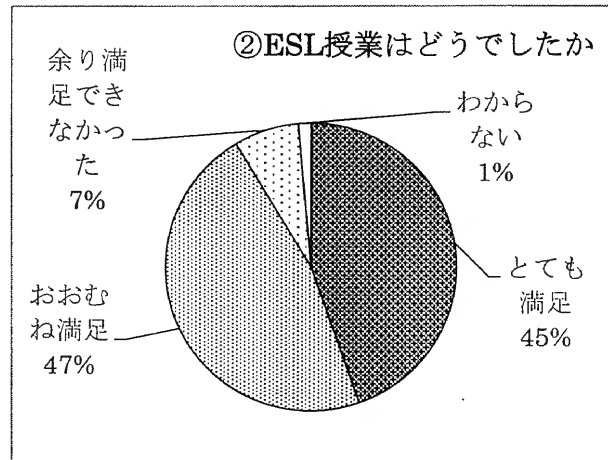
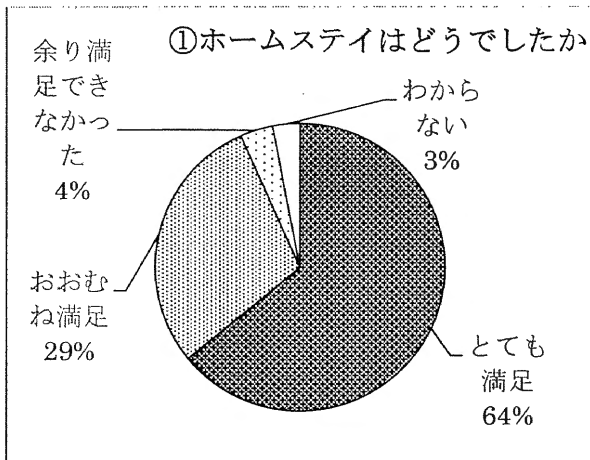
【資料 1】コミュニケーション・キャンプ事前・事後アンケート結果

4: そう思う 3: ややそう思う 2: あまりそうは思わない 1: そうは思わない

コミュニケーション・キャンプ事前アンケート					
1	2	3	4	5	6
新しい学校やクラスでうまくやっ ていけるか不安 を感じている	コミュニケーション・ キャンプに行くのが 楽しみだ	まわりの人と気 楽に話し、仲良 くなることができ る	勉強するとき、 目標を設定して 集中して取り組 んできた	人に言われてで はなく、自分で 考えて行動して いる	自分の気持ちや 考えをことばで 伝えることが得 意だ
3.09	3.23	2.76	2.71	2.87	2.59
コミュニケーション・キャンプ事後アンケート					
1	2	3	4	5	6
新しい学校やクラスでうまくやっ ていけるか不安 を感じている	コミュニケーション キャンプは楽し かった	活動班や生活 班の人と仲良 くなることができ た	サイレント学習 では集中して取 り組むことがで きた	人に言われてで はなく、自分で 考えて行動でき た	自分の気持ちや 考えをことばで 伝えることがで きた
2.31	3.83	3.72	3.83	3.38	3.3
-0.78	0.6	0.96	1.12	0.51	0.71

コミュニケーション・キャンプ事前アンケート					
7	8	9	10	11	12
人の意見を聞 き、受け入れる ことができる	まわりの人の気 持ちを考えて行 動している	悪いことをして いる人がいた ら、悪いことをし ないよう働きか けることができ る	自分の性格や 将来について考 えている	物事に最後まで 取り組もうと努 力するようにし ている	自然環境の大 切さについて考 えることがある
3.27	3.18	2.77	3.26	3.27	3.4
コミュニケーション・キャンプ事後アンケート					
7	8	9	10	11	12
人の意見を聞 き、受け入れる ことができた	まわりの人の気 持ちを考えて行 動できた	まわりの人に積 極的に働きかけ ることができた	自分の性格や 将来について考 えることができ た	物事に最後まで 取り組もうと努 力することがで きた	自然環境の大 切さについて考 えることができ た
3.55	3.46	3.08	3.05	3.62	3.79
0.28	0.28	0.31	-0.21	0.35	0.39

【資料2】カナダ校外学習アンケート結果



【資料 3-1】カナダ校外学習日程表 5,6,7 日目は ESL チーム生徒用

日次	月日 (曜)	地 名	現地時間	交通機関	スケジュール (各バスに 1 名コーディネーター同行)	食事
1	2017 年 3/9 (木)	成 田 空 港 成 田 空 港 発 バンクーバー空港着 バンクーバー メイプルリッジ	15:00 18:35 19:00 10:35 10:40 17:15	 JL018 AC004 専用バス	成田空港集合 第一ターミナル AC 利用 (B 組・D 組) 第二ターミナル JL 利用 (A 組・C 組) 出国手続き後、空路バンクーバーへ ・・・・・・・・・・日付変更線・・・・・・・・・・ 入国手続き後、バスにて市内観光 リッチモンドセンターのフードコートで自由昼食、 スタンレーパーク (写真撮影) バンクーバー水族館、 ホストファミリーとのミーティングポイント 対面後、各家庭へ ＜ホームステイ泊＞	 タ：機内 朝：機内 昼：× タ：○
2	3/10 (金)	メイプルリッジ バンクーバー メイプルリッジ	09:00 10:30 11:00 11:50 12:30 14:15 ～15:30 17:00	スクールバス — スクールバス	学校出発 ブリティッシュコロンビア大学到着 UBC 講師によるレクチャー (講義形式) UBC 学生との交流 (生徒 10 名: UBC 学生 1 名) キャンパス内にて昼食 (ランチ BOX 持参) ESL 生徒はキャピラノ見学 課題研究生徒は バスの中でのオリエンテーション UBC で引続き 概要を説明後、自由見学 聞き取り調査 学校到着後、各家庭へ ＜ホームステイ泊＞	 朝：○ 昼：○ タ：○
3	3/11 (土)	メイプルリッジ	終 日	—	ホストファミリーと過ごす休日 ＜ホームステイ泊＞	朝：○ 昼：○ タ：○
4	3/12 (日)	メイプルリッジ	終 日	—	ホストファミリーと過ごす休日 ＜ホームステイ泊＞	朝：○ 昼：○ タ：○
5	3/13 (月)	メイプルリッジ	09:00 13:00 ～ 17:00	— スクールバス	現地校教室で語学研修 ESL クラス 50 分×3 時間 生徒 10 名に対して講師 1 名+バディ 2 名 A コース：リタイアメントホーム 老人ホームでの文化発表会、施設見学、交流会 B コース：フードバンク 施設見学、講義、ボランティア活動 C コース：日系プレイス 館内見学後、日系人による講話・質疑応答 D コース：フォートラングレー ワークシートを利用してスカベンジャーハント、散策 E コース：国境・ホワイトロック 国境越え体験、街並み散策 生徒 10 名に対してバディ 2 名 バス 5 台に分かれてそれぞれの方面へ ＜ホームステイ (引率先生ホテル) 泊＞	 朝：○ 昼：○ タ：○

6	3/14 (火)	メイプルリッジ	09:00 13:00 ～ 17:00	－ スクールバス	<p>現地校教室で語学研修 ESL クラス 50 分×3 時間 生徒 10 名に対して講師 1 名+バディ 2 名</p> <p><u>Aコース：フォートラングレー</u> ワークシートを利用してスカベンジャーハント、散策 <u>Bコース：グランビルアイランド</u> マーケットを自由散策 <u>Cコース：スティーズトン</u> 缶詰工場ガイドツアーと街並み散策 <u>Dコース：グlausマウンテン</u> ゴンドラで上がり、ネイチャーガイド案内トレッキング <u>Eコース：フォートラングレー</u> ワークシートを利用してスカベンジャーハント、散策</p> <p>生徒 10 名に対してバディ 2 名 バス 5 台に分かれてそれぞれの方面へ ＜ホームステイ泊＞</p>	朝：○ 昼：○ 夕：○
7	3/15 (水)	メイプルリッジ	09:00 13:00 ～ 17:00	－ スクールバス	<p>現地校教室で語学研修 ESL クラス 50 分×3 時間 生徒 10 名に対して講師 1 名+バディ 2 名</p> <p><u>Aコース：アートギャラリー</u> 館内を自由見学 <u>Bコース：フォートラングレー</u> ワークシートを利用してスカベンジャーハント、散策 <u>Cコース：フォートラングレー</u> ワークシートを利用してスカベンジャーハント、散策 <u>Dコース：UBC 人類博物館</u> 館内を自由見学 <u>Eコース：グlausマウンテン</u> ゴンドラで上がり、ネイチャーガイド案内トレッキング</p> <p>生徒 10 名に対してバディ 2 名 バス 5 台に分かれてそれぞれの方面へ ＜ホームステイ泊＞</p>	朝：○ 昼：○ 夕：○
8	3/16 (木)	メイプルリッジ バンクーバー	09:00 11:00 12:00 18:30	－ 専用バス －	<p>現地校の教室で英語でプレゼンテーション発表 クラスごとに修了式、修了証授与 バスでバンクーバー市内のホテルへ ホテルに荷物おいてバンクーバー市内班別自主研修</p> <p>ホテルのバンケットで全員が集まっての夕食 ＜EMPIRE LANDMARK HOTEL VANCOUVER 泊＞</p>	朝：○ 昼：× 夕：○
9	3/17 (金)	バンクーバー バンクーバー空港発	07:00 ～9:00 10:00 11:00 14:10 14:50	 専用バス JL017 AC003	<p>朝食後バンクーバー主席領事講演会 一度お部屋に戻り出発準備 クラスごとにバスに乗り、空港へ向けて出発</p> <p>バンクーバー空港到着</p> <p>出国手続き後、空路成田へ</p>	朝：○ 昼：× 夕：機内
10	3/18 (土)	成田空港着	16:35 16:40	JL017 AC003	<p>到着後、入国手続き 税関手続き後、解散</p>	朝：機内 昼：機内

【資料 3-2】課題研究チーム生徒用 5,6,7 日目 日程表

5	3/13 (月)	メイプルリッジ	終 日	スクールバス	<p><u>F コース：グラビティライト・グラスマウンテン・スタンレーパークツアー</u> ・ Gondola で上がりネイチャーガイド案内トレッキング、ハイアスフィーストハウス見学、ファーストネイションの方による文化・考え方の講演 ・ネイチャーガイドによるスタンレーパークツアー</p> <p><u>G コース：グラビティライト・グラスマウンテン・スタンレーパークツアー</u> ・ Gondola で上がりネイチャーガイド案内トレッキング、ハイアスフィーストハウス見学、ファーストネイションの方による文化・考え方の講演 ・ネイチャーガイドによるスタンレーパークツアー</p> <p>生徒 6 名に対して講師 1 名＋バディ 1 名 バス 1 台で移動する</p> <p>＜ホームステイ泊＞</p>	朝：○ 昼：○ 夕：○
6	3/14 (火)	メイプルリッジ	08:00 ～ 20:00	スクールバス フェリー	<p><u>F コース：国境・フォートラングレー・キャピラノ</u> ・ワークシートを利用してスカベンジャーハント、散策 ・バスの中でのオリエンテーション、バスを降りて最初に概要を説明後、自由見学</p> <p><u>G コース：ボーイング社見学（12 名）</u> バスでボーイング社まで移動 館内見学ツアー シアトルまで行き、1 時間程度散策 バスで学校まで戻ってくる</p> <p>生徒 6 名に対して講師 1 名＋バディ 1 名 それぞれの車に分かれてそれぞれの方面へ</p> <p>＜ホームステイ泊＞</p>	朝：○ 昼：○ 夕：○
7	3/15 (水)	メイプルリッジ	08:00 ～ 17:00	スクールバス	<p><u>F コース：ピクトリア訪問（12 名）</u> フェリーで島へ渡り、バスで移動 BC ミュージアム見学、州議事堂見学、 自由散策でショッピング バスで移動し、フェリーでバンクーバーに戻ってくる</p> <p><u>G コース：国境・フォートラングレー・キャピラノ</u> ・ワークシートを利用してスカベンジャーハント、散策 ・バスの中でのオリエンテーション、バスを降りて最初に概要を説明後、自由見学</p> <p>生徒 6 名に対して講師 1 名＋バディ 1 名 バス 1 台で移動する</p> <p>＜ホームステイ泊＞</p>	朝：○ 昼：○ 夕：○